

# つるみの風

つるみの風 第53号  
2024年3月23日発行  
鶴見聖契キリスト教会  
〒230-0074 横浜市  
鶴見区北寺尾1-16-7  
TEL 045-572-0857

## 復活を信じるなら

今朝がたの強風で、せっかく満開になった近所のハクモクレンがたくさん散ってしまいました。道路もわが敷地も、祈りの手の形をした白く大きな花びらがあちこちに。風でごみが飛んでくると不快ですが、大きな花びらなら風情があるし、いずれは土に還るから許せてしまいいますね。皆さんのお住まいやお近くには、どんな花が咲いていますか？ 教会前の道が、三ツ池公園に出かける人で混雑し始めるのもそろそろでしょう。もうすぐ桜の季節。鶴見在住の皆さま、いかがお過ごしでしょうか。

イースターが巡って来るのは毎年花の季節。よみがえったイエスの墓には、いのちの復活を告げる春の花が咲き乱れていたのかもしれないね。

### ●見てきたような嘘？

復活節、イースターの季節になると、不謹慎な自虐ネタですが、「講釈師、見てきたような嘘を言い」なんて川柳を思い出します。十字架上で悲惨な死を遂げたイエスが金曜日の日没前に墓へと葬られ、日曜日の早朝に復活して墓は空になり、よみがえった姿を弟子たちの前に現わした、これが新約聖書の伝える復活記事です。イエスの死は紀元三〇年頃の歴史事実として、一般の世界年表にも載っています。が、復活となると、その事実性を回避するため、仮死説、幻覚説、心の中の復活説など、枚挙にいとまがありません。それは、歴史の先例がない一度限りの出来事ゆえ、人間には説明がつかないからです。復活は、講釈師よろしく「見てきたような嘘」なのか、はたまた神話か、それとも事実なのか、いずれにせよ私たちは向き合わざるを得ません。なぜなら、キリスト教が立つも倒れるも、ひとえにキリスト復活の事実性にかかっているからです。西欧の歴史や芸術の土台を提供して来たキリスト教の真偽が問われるのなら、なかなか大ごとですよ。

復活節、イースターの季節になると、不謹慎な自虐ネタですが、「講釈師、見てきたような嘘を言い」なんて川柳を思い出します。十字架上で悲惨な死を遂げたイエスが金曜日の日没前に墓へと葬られ、日曜日の早朝に復活して墓は空になり、よみがえった姿を弟子たちの前に現わした、これが新約聖書の伝える復活記事です。イエスの死は紀元三〇年頃の歴史事実として、一般の世界年表にも載っています。が、復活となると、その事実性を回避するため、仮死説、幻覚説、心の中の復活説など、枚挙にいとまがありません。それは、歴史の先例がない一度限りの出来事ゆえ、人間には説明がつかないからです。復活は、講釈師よろしく「見てきたような嘘」なのか、はたまた神話か、それとも事実なのか、いずれにせよ私たちは向き合わざるを得ません。なぜなら、キリスト教が立つも倒れるも、ひとえにキリスト復活の事実性にかかっているからです。西欧の歴史や芸術の土台を提供して来たキリスト教の真偽が問われるのなら、なかなか大ごとですよ。

### ●復活を信じない人その一

安心して下さい。復活を信じられないのは、科学が発達した今の世に生きる私たち現代人が最初ではなく、イエス当時の人々もまったく同じだったのです。ただし、それは科学的にどうのこうのではなく、その人の置かれた立場、イエスとのかわり方によって、復活との向き合い方が異なるからです。たとえばイエスを十字架に追いやった張本人のユダヤ宗教指導者たち。マタイの福音書によれば、十字架刑の翌日、ユダヤ指導者たちは総督ピラトのもとへ出かけて行き、イエスが生前「わたしは三日後によみがえる」と言っていたから、弟子たちがイエスの遺体を盗み出して復活を言いふらしたりせぬよう、三日目まで番兵に墓の番をさせてくれるようお願いして了承されます（マタイ二七・六二、六六）。おそらく彼らはイエスの奇跡を間近で見えて来ましたが、復活予告をただのまやかしとは思えず秘かに恐れていたでしょうし、ようやく邪魔者を排除したからには、よみがえってもら

イエスが話の内容を問うと、暗い顔をして立ち止まり、イスラエルを解放する方と望みをかけていたイエスさまは死んだ、しかし三日目に墓へ行った女性たちはイエスの身体が見当たらず、御使いが現れてイエスは生きていますと告げた、と証言したことを語りました。まさによみがえったイエス自身がいつしよに歩いているというのに、それがイエス本人だと気づかないばかりか、復活証言がまったく喜びにつながっていないのは、彼らには悪いけれど、ちよつと滑稽に思えてしまいます。

### ●その顛末あれこれ

さて、復活を信じない人たちが、いや信じたくなかった人たちの代表格であるユダヤ宗教指導者たちはその後どうなったか。なんと日曜日の早朝、イエスの女弟子たちの目の前で地震とともに墓の石が動き、御使いが現れて、「(死んだイエスは)ここにはおられません。前から言っておられたとおり、よみがえられたのです。さあ、納められていた場所を見なさい」(マタイの福音書二八・六)と告げました。墓守の番兵たちはどうなったかですって？「その恐ろしさに番兵たちは震え上がり、死人のようになつた」(四)のでした。彼らは転がるように都へ戻り、起こった出来事をすべて祭司長らに報告。「そこで祭司長たちは長老たちとともに集まって協議し、兵士たちに多額の金を与えて、こう言った。「弟子たちが夜やって来て、われわれが眠っている間にイエスを盗んで行った」と言いなさい」(一二、一三)。イエス復活が事実であることを心の

自分たちの地位や権威すべてを放棄せざるを得ないばかりか、まことのメシア・イエスを十字架で殺した責任を問われることになるからです。

### ●心は内に燃えていた

他方、エマオ途上の二人の弟子はどうなったでしょうか。彼らは見知らぬ男ならぬ復活のイエスに叱られます。「ああ、愚かな者たち。心が鈍くて、預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち。キリストは必ずそのような苦しみを受け、それから、その栄光に入るはずだったのではありませんか」(ルカの福音書二四・二五、二六)。復活のイエスは旧約聖書全体からイエスの復活を説き明かし、エマオ村での食卓の場面で、ついに二人の弟子の目が開かれて、それが復活のイエスであるとわかったのでした。その姿は見えなくなるのも、一人はこう述べます。「道々お話しくださる間、私たちに聖書を説き明かしてください。私たちが心は内に燃えていたではないか」(三二)。復活したイエスが、信じる者たちと共に歩んでくださる、このモチーフはその後のキリスト教の歴史において、迫害や殉教という苦難の中に生きる無数のキリスト者たちを慰めて来しました。いや、そこまでの壮絶な苦難でなくとも、日常のちよつとした悩み苦しみを経験する私たちとも、ともに歩んでくださいます。だから復活はたいせつなのです。

### ●目撃証言を信じる

とどのつまり、新約聖書の復活記事とは、イエスの弟子たちによる目撃証言集。講釈師/講師の名調子は、その場面を彷彿とさせるリアリティにあふれてはいても、やはりその場に居

合わせたリアリティとは違いますが、でも、聖書の記事はまさしくその場において空の墓を見、御使いに出会い、エマオ途上で復活のイエス自身と共に歩み、教えていただいた目撃者たちの証言。彼らはいずれ迫害や殉教の憂き目に遭う人たちでしたが、「見てきたような嘘」のために命を懸ける人はいないでしょうか。復活のイエスに出会い、この方こそまことの王、救い主、主の主と確信したからこそ、証言を初代教会の仲間たちと共有し、その証言が後に福音書という形で文書化されるに至りました。私たちは、この目撃証言の真実に賭けているのです。いや、キリスト教会二千年の歴史と無数のキリスト者が、このイエス復活の目撃証言に依って立つのです。大袈裟でしょうか。

「希望？ それは危険なことばだ」とレッドはアンディをたしなめました。が、無実の罪で九年の牢獄生活に甘んじたアンディが希望を捨てず、鮮やかに脱獄して刑務所長の不正を暴いた後、仮釈放されたレッドは海辺のアンディと再会します。希望があつてこそ人は生きられる。そう、だから私たちはイエスの復活を信じたのです。飛躍しているでしょうか。死と悪魔を打ち破ったイエスの復活ですから、このこと自体確かに飛躍でしょう。でも、この飛躍あつてこそ、私たちは暗闇のようなこの世にあつて、神の国の生活を送ることができるのではないかと、マタイの福音書はこう締め括られているのですから。「見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます」(二八・二〇b)。

これだけ世界情勢が不穏で、国内政治に対する国民感情も、怒りを通り越して呆れ諦めムードになると、希望を持つこと自体が難しく、現実離れしているのかもしれない。「希望？ それは危険なことばだ」、これは映画『ショーシャンクの空に』で、調達屋のレッドが新入りのアンディに投げかけることば。すでに何十年も刑務所暮らしを続けるレッドにとつて、希望は持ちようもない幻想だったので。でも、散ってしまったハクモクレンがすでに翌年のつぼみを内に秘め、一年後には見事によみがえって花を咲かせることを誰も疑いません。古代エジプト人も、自然のサイクルに死からの復活を読み取っていたことが、ヒエログリフや壁画から解明されています。はからずも、

安心してください。復活を信じられないのは、科学が発達した今の世に生きる私たち現代人が最初ではなく、イエス当時の人々もまったく同じだったのです。ただし、それは科学的にどうのこうのではなく、その人の置かれた立場、イエスとのかわり方によって、復活との向き合い方が異なるからです。たとえばイエスを十字架に追いやった張本人のユダヤ宗教指導者たち。マタイの福音書によれば、十字架刑の翌日、ユダヤ指導者たちは総督ピラトのもとへ出かけて行き、イエスが生前「わたしは三日後によみがえる」と言っていたから、弟子たちがイエスの遺体を盗み出して復活を言いふらしたりせぬよう、三日目まで番兵に墓の番をさせてくれるようお願いして了承されます（マタイ二七・六二、六六）。おそらく彼らはイエスの奇跡を間近で見えて来ましたが、復活予告をただのまやかしとは思えず秘かに恐れていたでしょうし、ようやく邪魔者を排除したからには、よみがえってもら

復活を信じない人その二  
復活を信じられないもうひとつのグループは、あろうことかイエスの弟子たちでした。その中でも、日曜日の午後、エルサレムからエマオに下る道を歩いていた二人の弟子は代表格でしょう。なぜなら彼らは背後から復活のイエスが近づいて話しかけられても、最後までイエスと気づかなかつたからです。二人はエルサレムで起こったイエスの死と復活の出来事を語り合っていました。ただしそれは希望なき語り方でしたから、復活の

自分たちの地位や権威すべてを放棄せざるを得ないばかりか、まことのメシア・イエスを十字架で殺した責任を問われることになるからです。

とどのつまり、新約聖書の復活記事とは、イエスの弟子たちによる目撃証言集。講釈師/講師の名調子は、その場面を彷彿とさせるリアリティにあふれてはいても、やはりその場に居

わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます」(二八・二〇b)。

